

「自分ごと」として 取り組むことの大切さ

1950年兵庫県生まれ。博士（教育学）。1974年大阪教育大学卒業。明石市立朝霧中学校教諭、神戸大学附属住吉中学校文部教官教諭、明石市立大久保中学校教諭、兵庫教育大学助教授、京都教育大学教授・副学長、広島国際学院大学特任教授を経て芦屋大学特任教授。主な著書に『新編 技術科教材論』竹谷出版（共著、2021）、『アクティブ・ラーニングで深める技術科教育～自己肯定感が備わる実践～』開隆堂出版（編著、2015）、『技術科教育はなぜ必要か～人を育て文化を築く「ものづくり」～』竹谷出版（単著、2014）、『教授過程における技術的能力を高める教材』風間書房（単著、2006）がある。



芦屋大学
特任教授・
京都教育大学
名誉教授

安東 茂樹

の顕著な成長に遭遇できる喜び等がある。その経験は、すべて「自分ごと」として生き方や考え方や人柄にまで影響を及ぼしている。



2 若者を取り巻く背景から

高度情報化社会の中で、多くの若者の生活実態が変化している。時短や効率を求めることがトレンドとなり、同じことでも短時間で対応するコスパ（効率主義、要領のよい生き方などのこと）に価値があると考えている。その結果、映像や画像を倍速視聴やネタバレ許容（視聴）で楽しむコスパ重視で、自分の好きなものにお金や時間、熱量をかける。日々の生活では、朝起きたらすぐインターネットにつなぎ、動画で寝落ちするまで一日中スマホを離さない。SNSの普及で、友達同士いつでも連絡ができ、それへの反応を求められる。そのため、流行っている映画やYouTubeを観ていないと友達と話が通じない、自己の存在を示すことができないと思う。若者は、共感することや承認されることで自己肯定感を持つ

としている。

このように、間接的でバーチャルな世界が広がり、個々人の生き方に影響を及ぼしている一方、リアルな世界やリアルな生き方の大事さを再確認する傾向も散見される。そこで「自分ごと」という文言に焦点を当て、「自分ごと」として取り組むことの大切さについて考究する。



3 いま求められる「自分ごと」としての取り組み

これまで「他人ごと」という言葉は日常によく使われてきたが、「自分ごと」は恒常的に使用されてこなかった。その必要がなかったからである。情報の供給過多で生活する中で、孤立感や無責任な風潮が蔓延する今こそ、「自分ごと」の大切さが浮上している。「自分ごと」のリアルな現実対応として、情報を選別し取捨選択する自身の課題とすることが求められている。

次に、「自分ごと」を取り上げている書籍から考察を加える。

桑畑英紀らは、企業（株）電通

1 はじめに

私は、技術科教育の教育研究に携わって半世紀になる。現職教員として初任の頃から「ものづくり教育の面白さとやりがい」を感じ、変化することなく自分ごととして大切に持ち続けている。その要因として、ものづくり教育の創造力のダイナミックさや対面する生徒



筆者現職教員時代の授業の様子

の社員の意識や行動を変革する手法として、「自分ゴト化」の取り組みでモチベーションの向上とともに、企業に対するロイヤルティの形成やソフトパワーの充実と競争力強化が実現すると論じている。社員が会社のブランドを実現する主体であることを自覚し、当事者意識を持って行動できる状態になることを「自分ゴト化」と定義し、主体的に行動することの大切さを述べている¹⁾。

同じく企業の人材育成として、博報堂 DY グループエンゲージメント研究会では、人々は莫大な情報に囲まれ、メディアを通して流れる情報の99%をスルーし、選ばれた1%が「自分ごと」である。多くの人に伝播され、社会を動かすカギは「自分ごと」にあると論じている²⁾。

次に、学校教育に関わって、菊地栄治は社会、経済、教育等のあらゆる現象の課題や問題を「他人ごと≒自分ごと」、つまり同一化する必要性を述べ、すべての社会領域の多元的生成モデルに基づいて「自分ごと」の意義を論じている。「他人ごと≒自分ごと」となるためのフェーズとして、Ⅰ.「他人」と「自分」は同じ人間だが「いかにわかっていないか」を自覚、Ⅱ.「他人ごと」と「自分ごと」の出来事を重ねられる空間、Ⅲ.身体レベルを含め「切実さ」次元での出遇い、Ⅳ.「他人ごと」や「自分ごと」の背景にある構造に踏み込む学び、Ⅴ.「自分ごと」として気づいたことを「他人ごと」へと転換するプロセス、の重要性を述べ、教育改革が疎かになっていると警鐘を鳴らしている。その課題を、①主体的・対話的で深い

学びを「他人ごと≒自分ごと」で再構築できるか、②学校で起きている課題について、他人ごとをいかに自分ごと化できるか、③「社会の限界性」をふまえた社会的課題の解決という視点で捉えられるか、と挙げている³⁾。これらは「自分ごと」の大切さを求めるフェーズと、新しい教育の在り方に示唆を与えている。

新しい教育の学習評価の視点である「主体的に学習に取り組む態度」の「主体的」は「自分ごと」に通じ情意を含めた態度形成と考えられる。具体的には、学校教育における学び合いは、社会のこと、政治経済のこと、友達や地域の人々のこと等、すなわち人間生活に関わる出来事で、そこで生じる課題を「自分ごと」としてとらえられる力や態度を求めている。鈴木秀幸は、学校教育の究極の目標は、生徒が自立した学習者になることで「主体的に学習に取り組む態度」の育成をめざす取り組みであると論じている⁴⁾。このことから、「自分ごと」の究極の位置づけは、学校教育の目標であり、学習指導要領が求めている教育課題と考えられ、具体的には「主体的に学習に取り組む態度」を育むことである。

4 まとめ

人は集団（社会）の中で暮らしている社会的動物と言われ、個性や自分の特徴を示し、他と違う自分の存在を大切に生きている。そこに「自分ごと」として取り組むことの大切さが存在し、他者との関係で社会生活を送り、多様な課

題を「自分ごと」として主体的に取り組む態度が求められる。

本稿をまとめると、以下のようになる。

○若者の多くは、SNSの普及などにより、「いいね」などの承認欲求を満たすとともに、共感する生き方を求められている。

○企業での変革や人材育成及びブランド実現は、働く個々の社員が当事者意識を持って「自分ごと」化して行動することがカギになる。

○あらゆる現象において「他人ごと」と「自分ごと」を同一フェーズに位置づけ、多様な課題を「自分ごと」として「主体的に学習に取り組む態度」の育成を求めていく必要がある。

以上のことを手がかりに、「自分ごと」として取り組むことの大切さを再確認することが重要で、これからの課題でもある。その追求を通して、人間同士が関わりながら互いに共感や承認し合って、個々に自己肯定感の持てる社会や環境をつくっていくことをめざしたい。

参考文献

- 1) 桑畑英紀・津布楽一樹・谷昭輝・笹木隆之：『自分ゴト化 社員の行動をブランディングする』ファーストプレス、2011
- 2) 川名周・藤井久・波多野昌樹・山下史郎・田中双葉・久地楽雅也・森下茂雄・浜田茂：『「自分ごと」だと人は動く 情報がスルーされる時代のマーケティング』ダイヤモンド社、2009
- 3) 菊地栄治：『他人事≒自分事 教育と社会の根本課題を読み解く』東信堂、2020
- 4) 鈴木秀幸：『「主体的・対話的で深い学び」の意義－社会的構成主義と形成的評価の視点から－』、pp.7-9、『指導と評価』No.814、図書文化、2022